

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2005年 春号 4月13日発行/季刊
発行人：大崎 清見
連絡先：府中市住吉町 2-30-31.
3-508 Tel 042-368-2183



ヒガンバナが美しい農家の長屋門も残る四谷・日新地区の田園風景

四谷・日新町地域を 「ふるさと景観保全 地区」として提案

府中かんきょう市民の会は1月29日に開いた「水に親しむ環境づくりシンポジウム2005」において、府中市西南部の四谷・日新町地区を「ふるさと景観保全地域」として保全することなどを提案しました。

同地区には市内でも伝統的な田園風景が残され、今日でもコメ作り文化が息づいているところで、地域の小学校などで子ども達にもコメ作り体験をさせるなど、地域の自然と農業を伝える努力を重ねており、「ふるさと景観」として保全するにはふさわしいところです。(提案の全文は7頁に掲載)



① 自転車・歩行者に危険な 旧甲州街道

旧甲州街道は、歩道が極端に狭く、しかも高さ15センチの段差があるため歩行者、自転車の通行に大変危険な道路となっています。「自転車通行可」の標識が設置されていないのに、現実にはほとんどの自転車が歩道を走っています。危険なのは段差だけでなく、保護柵もなく、歩道内に電柱、立て看板、ごみ箱、車の乗り上げ等の障害物があり、歩行者と自転車、自転車同士のすれ違いは出来ず自転車はやむなく危険な車道を走っています。車椅子の通行は歩道の傾斜のため車道に転落する危険もあります。

この歩道は1960年代に段差のある現在のものに変えられたとかで、車道幅を確保するため段差化できない東府中以東の一部の歩道は車道との単断面歩道のままです。自転車のためには、むしろこの単断面歩道が安全かつ走りやすいと思われそうですが、将来は段差歩道となる見込みです。

クルマの通行を優先し、歩行者、車椅子、自転車といった交通弱者に一方的な負担と危険をもたらす旧甲州街道を、地域のコミュニティー道路として位置づけ、バリアフリーといった考え方のもとに、改良を加えることはできないものだろうか。(写真は旧甲州街道の現状)



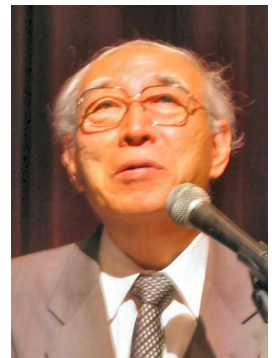
府中市内にはすぐれた景観が存在しているいっぽうで、依然として悪い環境の場所や、市民から見ても首をかしげたくなる光景も存在します。会報ではそれらの現場を「市民の目」としてとらえ、問題の解決を目指す取り組みに発展させたいと願い、連載を始めます。会員皆様のご協力と情報提供をお願いします。(羽尻元彦)

水に親しむ環境づくりシンポジウム2005

「水に親しむ環境づくりシンポジウム2005」が1月29日、府中市中央文化センターで開かれ、水問題やみどり保全に関心を持つ市民らが160人参加しました。東京農工大学とNPO法人府中かんきょう市民の会が共同で開催してきたこのシンポジウムは、今年3回目を迎えました。過去のシンポからさまざまなことを学んだことを土台に、今年は当会から水とみどりを守るためのひとつの提案を行ったことが特色です。



野口府中市長



守山弘東京農大客員教授

野口市長が郷土の森周辺のネットワーク整備を約束

来賓として出席された野口府中市長はあいさつのなかで「水とみどりのネットワークの拠点として郷土の森周辺を整備します」と、行政としても水に親しむ環境整備に乗りだすことを約束し、シンポジウムのサブタイトル「水と緑のネットワークを実現しよう」という市民の取り組みを励ましました。

共感よんだ「田んぼの学校」

プログラムでは、まず守山弘東京農大客員教授が「田んぼの学校から学ぶもの」と題して基調講演を行いました

守山教授は、日本人の懐かしい原風景である田んぼについての自然史的解明を行ったうえで、田んぼにおける人と生物の深く長い関わりについて学ぶ「田んぼの学校」の意義や役割について、「それ自体が博物館の役割(エコミュージアム)を果たしている」などと語り、茨城県谷和原村の「古瀬の会」の「田んぼの学校」について紹介しました。

この「田んぼの学校」が昭和40年代(1960年代)まで残されていた谷和原村古瀬地区の自然環境と文化を復元し、かつて谷和原村と共通の農村文化圏にあった昭和30年代(1950年代)の東京葛飾の農村の姿を、現在の葛飾区民(子ども達)に体験学習してもらうために運営されており、ここでは田んぼや、水路、林、あぜ道などで暮らす生き物につ

いての学習のほか、人々の暮らしや行事、そして子どもの遊び体験も行っています。

守山教授は、伝統的な田んぼの生物相の復元は、その生息環境としての農村環境の復元を伴うこと、そして稲作技術を復元しようとするれば環境の復元が必要であること。そして、これは同時に地域社会(集落)の復元を伴うと述べ、環境の復元は地域の再生に展望をひらくなど、「田んぼの学校」の博物館的役割は奥が深いことを強調しました。



茨城県谷和原村の「古瀬の会」の「田んぼの学校」風景

参加者の声：市民提案はよくまとまっている。市民は何をするのか、早く実践者になりたい。「田んぼの学校」を府中でもぜひ実現させたい。

パネル討論

ふるさと景観を
活かした
水と緑の
まちづくりを考える

千賀東京農工大学教授



各地の水と緑のまちづくり報告に共感する参加者（中央文化センターひばりホール）

パネル討論では千賀裕太郎東京農工大学教授をコーディネーターに、「ふるさと景観を活かした水と緑のまちづくりを考える」をテーマに、パネリストの府中市緑のまちづくり推進課長の鈴木昭さん、府中・日新カモミール幹事の小西さつきさん、野川で遊ぶまちづくりの会代表の尾辻義和さん、日野・倉沢里山を愛する会事務局長の田村裕介さんがそれぞれ語りました。

●市民参画型の環境行政進み始める

鈴木さんは、府中市の場合、公募市民28人による「緑の活動推進委員会」が、水と緑のネットワークに関わってウォーキングマップづくりに取り組んだり、雑田堀の親水路整備などをまとめたことを受け、市の事業予算化など、市民参画型の環境行政が進み始めたことについて報告しました。

●ユニークな日新カモミールの活動

小西さんは、親子会員のグループ「日新カモミール」の日新地区の農地と多摩川をフィールドにした活動について話しました。地域のコメづくり体験のなかで得られた藁に納豆を入れる「藁づと」を作り、実際に納豆をつくることや、多摩川遊びなど自然と地域を愛するところを育てる活動について紹介しました。

●調布でも「田んぼの学校」体験

尾辻さんは、調布の野川地域での「田んぼの学校」の経験を語りました。年間を通じてコメづくりの全ての作業を子ども達に体験させる活動のなかで、自然と田んぼに生息するカエルなどの生物とのふれあいや、コメを大切に育てる心が育っていることは金銭に換算できない価値を生んでいると述べました。

●里山と畑の自然循環を再生

田村さんは、相続にからんで日野市内の里山を同市に寄付した結果、市民参加による里山維持活動が生まれ、これと市民による「遊び半分」の畑作が結びつくことにより、里山と畑の自然循環も再生させることができ、同時に新しいコミュニティ形成にも効果をあげつつあると報告しました。

参加者の声：府中から水田が
消滅するのはとても寂しい。
行政とNPOが協働して「水
と緑のネットワーク」を広げ
ることを大いに期待している

なおこのシンポジウムは財団法人日本科学協会平成16年度「水域環境をめぐる学習活動等の成果公表支援」事業として認定され援助いただきました。



鈴木昭さん

小西さつきさん

尾辻義和さん

田村裕介さん

「農のあるまちづくりを語る会」

府中市内の農地は、相続税制度などにより30年前と比較してすでに半減しており、日野市、国立市など近隣市と比較しても農地の減少傾向は、より強まっています。

このように市内の農地が危機的な状況を迎えているなかで、昨年10月24日、四谷文化センターで「農のあるまちづくりを語る会」が開催され、地域の住民や農業関係者など27名が参加し、府中の農業と農地の保全を願って、熱い思いを語り合いました。

議論では、現在の「生産緑地制度」は“農地の安楽死制度”ではないかとの発言もとびだすなか、農地と水と緑を保全するために国に対し、どんどん意見を述べてゆくことが大切だと共通認識も広がりました。



府中かんきょう市民の会・農工大の活動

「語る会」では、まず、府中の農業の維持と農地の保全をもとめて活動を続けている当会と農工大の活動による、日新小学校実習田と府中四谷地区用水の生き物調査について報告され、農地と自然環境が密接に結びついていることが確認されました。

しかし、これらの環境を支えている農業用水である「府中用水」の取水方式が2005年からは従来の堰からの取水に代わり、ポンプ取水になることが報告され、田んぼの生き物がポンプ取水でどのように変化するか、みんなでウォッチングしようとの呼びかけもありました。

また、四谷地区の用水を「府中四谷地区用水博物館マップ」として紹介する提案もなされました。このマップは、四谷の原風景を散策する事が出来るよう工夫されており、参加者の関心呼びました。

緑の環境保全を提案

「府中かんきょう市民の会」の大崎理事長は府中市のような都市地域における残された自然的環境の保全…緑地保全について、①地域の環境が良くなければ地球環境も良くない。

②環境は行政だけではなく、行政・市民の協働により、よりよい府中の環境を具現していこうと呼びかけ、主な施策の概要について提言しました。また、府中には「水と緑の保全」について3つの計画があり、「水と緑のネットワーク」としてまとめ、景観法を適用し“緑の環境を保全しよう”と提案しました。「語る会」では、この意見交換をもとに、府中市および都や国にも提案すること呼びかけました。

農環境の大切さを子どもたちに伝えよう

意見交換では、農政担当の府中市職員から農家の一大事は相続税問題だとの意見がだされ、関連する施策は、生産緑地制度は国土交通省で、環境保全は環境省、税金は財務省と各省庁にまたがっているが、都市農業を守るため省庁の横断的な組織で、税制度から農地制度の全てを見直す施策が必要である。国に対して市民の声、現場の声として「緑・農のあるまちづくりを進めたい」「食の安心・安全を守りたい」をいかにして届けるかが非常に重要であると述べられました。

農業者からは、中国から多くの輸入野菜が入ってくる。虫が食ったら売れないので見た目のきれいさを維持するため、どのような農薬が使われているかわからない。食の安全を守るために、そのプロセスを知らなければならない。生産者の顔が見える農業が大事だ。宅地開発で畑に雨水が流れ込み野菜栽培に影響が出ている。公共施設のために農地を売る事になった。俵が外に出て農業を継がない。などといった具体的な現状や悩みもだされました。

一般参加者からは、都市の中の農というのは、単なる農業ではなくてまわりの風景と一体となって存在してはならない。用水路とか、屋敷林があり、風景として、環境としてとても大事である。子どもたちに体験させて、知らせる事が私たちの義務だとの声もありました。

(田上昌宣)



援農ボランティア体験記



市村さんのハウス野菜。トマトがハウスいっぱい成長している。

「何かできるかな?」と思い切って参加!

私は援農ボランティアを始めて1年ちょっとになります。月に2回、日曜日の午前中2時間、農家の畑仕事の手伝いをしています。「かんきょう市民の会」で援農をしようという提案があった時、参加の手をあげたのがきっかけでした。何人かのグループで援農をするのなら、全く素人の私にもできることがあるかもしれないと思ったからです。

私は健康な体を作るには「食べ物」が大切だと感じています。生協に入って安全な食品は購入していますが、府中産の安全な野菜も食べていきたいと思っています。地場産の野菜は作り手や育て方が見えて安心なので、府中の農業がずっと続いていくことを願っているのですが、現実には農家も高齢化に直面しており、府中市の就農者の平均年齢は63才です。これでは10年、20年後の農業はどうなってしまうのでしょうか。本当に深刻な状況です。そこで私はただ地場野菜を食べるだけでなく、何か農家の手助けができないかと考え、援農に参加することにしました。

やってみると、おもしろい!

市民の会のボランティアを受け入れて下さった押立町の市村さんは、76才のお元気な農家の方です。冬の畑では立派な白菜やおいしそうなネギ・ブロッコリが育ち、夏のビニールハウスではトマトやキュウリが天井まで伸びて、たわわに実をつけています。

さすがに何十年も農業をやっておられる「プロの仕事」です。そのような農家で私たちがお手伝いすることは、収穫の終わった畑やハウスの中の片付け、草取り、苗の植え込み、農作物の収穫など初心者でも慣れればすぐにできる作業です。

梅沢 みどり

3月にはハウスの中でカブの草取りをしました。葉は10cmぐらい伸びて、小さいカブが土からちょこっと顔を出しています。市村さんが間引きをして、私たちはカブの間の草を丁寧に取りました。

一昨年の始めたばかりの頃は、援農の後は疲れて家で横になったりしていました。が今では首には手ぬぐいを巻き、袖カバーにゴム手袋、長靴というスタイルではりきってやっています。まだまだ市村さんの仕事の速さには及びませんが、それでも4~5人のグループで参加していると、意外にはかどります。そして作業後は、何とも言えない爽やかな充足感に包まれ、奥様の心づくしの昼食をいただきながら話が弾みます。また、とれたての新鮮な野菜を購入するのも楽しみの一つです。私は農家の手助けになればとの想いで参加していましたが、今は私自身へ返ってくるこの「爽やかな充足感」が援農参加へのエネルギーになっています。

援農ボランティアに参加しませんか?

府中市が昨年、消費者グループに行った農業アンケートで「できるだけ農地を残し、これ以上減らさないで欲しい」という意見が94%近くありました。でも意見を言うだけでは何も実現しません。さあ、もう1歩、参加する市民になりましょう。あなたのほんのわずかな時間を農業に提供しませんか? 気持ちのいい汗をかきませんか? 援農ボランティアに参加して、府中の農業が少しでも息長く継続するよう手助けをしませんか?

問い合わせは「府中市産業経済課農政係」或いは「府中かんきょう市民の会」へどうぞ!



たまには「反省会」で盛り上がる。

(中央のセーター姿の市村さんを囲むボランティア)

多摩川流域リバーミュージアム

第2回研修に参加して

府中では初の研修会

TRMでは、多摩川を舞台としたさまざまな市民の活動を推進し、支援する人材育成のために多摩川に関する自然と歴史・文化に関する知識や観察記録の習得、水辺の安全管理に対する理解を深める研修を行っています。

多摩川中流域の府中地区では、第2回研修が2月12日に府中市の郷土の森博物館で、また野外研修は近くの多摩川で行われました(写真)。参加者は、小学生、大学生と一般社会人など老若男女合わせて43名で、うち府中かんきょう市民の会員は17名でした。

当日の研修項目は次の通りです。

府中野鳥クラブの生い立ち

大沢邦夫(当会々員)さんからは、長いあいだ野鳥を観察し続け、それに関係する人との触れ合いなど、大沢さんの自分史が語られました。そして、最後に“記憶より記録”、“野鳥を通して自然を学び、自分も楽しむ”と閉められました。

カワラノギクの再生活動

矢崎小学校の池上先生からは、絶滅種になっているカワラノギクを再生させようと子どもたちと苗をポットで栽培して自然の教材とした体験についての悲喜こももな話がありました。“自然はわからないことが多い、何年もかけて観察してきて初めてわかることがある”との先人の言葉が身にしみます。また、市民の会員の藤井千代さんの府中かんきょう塾でテーマに取り上げたカワラノギクの栽培を河川敷で今も続けている話もありました。



植物から見た河川環境の特徴

佐々木 寧(埼玉大工学部)先生は、植物生態学を専門とする学者で、多摩川の植生の変化、府中地区の植物群落の特徴、植物群落分布を中心とした継続的調査の意義などの概論が話され、近くの多摩川(大丸用水堰下流河川敷と中州)での現地調査を行う。GPS(衛星を使つての地球上の位置が確認できる機器)を使つてのカワラサイコとウイーピングラブグラス(weeping love grass)をカウントしました。またススキとオギの相違、土壤環境適正などフィールドでの研修は具体的で、その効果は大きいものがありました。

市民による河川環境の調査

東京農工大の小倉紀雄先生は、河川環境の調査の意義と役割について解説された後、身近な水環境の全国一斉調査(市民の会も参加、2004.6.6)の結果概要(パンフレット配布)を報告。今年も一斉調査を6月5日(午前中)に実施するとの参加協力の呼びかけがありました。

以上、TRM研修は私たち多摩川流域に住む市民にとって有意義な一日となりました。(竹田 勇)



TRM…多摩川流域リバーミュージアムは、多摩川流域全体を博物館に見立てて、多摩川の自然や歴史、文化についてさまざまな形で楽しみ、学習することを通して多摩川とその自然を流域の人々の共有の自然環境財産としようというもの。具体的には、市民団体や学校などが行う河川観察会、自然学習や文化芸術活動などへの支援のほか、「岸辺の散策路」「川の一里塚」「水辺の楽校」などの河川ふれあい施設などがあり、また実際に多摩川の川原に立ってIT機器を活用して自然・歴史・文化・防災などの情報に接するサービスも行われている。

参考ホームページ⇒

www.tamariver.net/katsudou/index.htm

市民提案「ふるさと景観の保全と創出」

NPO法人
府中かんきょう市民の会 2005.1.29

1.提案の背景

①四谷・日新町地域に残る豊かな“ふるさと景観”

- ・多摩川取水による水田耕作の長い歴史と伝統
- ・農のある風景を構成するもの、特に水田のもつ多面的機能に注目…農村集落、水田、用水路、あぜ道、樹林(屋敷林、畦畔、寺社)、祭礼、どんど焼き／大気浄化、気象緩和、地下水涵養、防災、景観、生態系保全、環境学習／うるおいとやすらぎのある生活空間形成
- ・四谷・日新町地域に残る農のある風景は、府中のふるさと景観を代表…府中市都市景観賞公募(2004年)で農のある風景が市民から大きな支持を得る

②“ふるさと景観”が直面する危機的現状

- ・市街化農地は都市計画上、持続的農地保全と農業振興が担保されない
- ・都道が水田や樹林を分断する形で開通し、農地が開発の危機にさらされている

③“ふるさと景観”を守るための歩み

■とりまく背景

- ・食料・農業・農村基本法「農業の多面的機能の発揮」(1999年)
- ・文部科学省・農林水産省「あぜ道とせせらぎづくり」事業(1999年)
- ・「総合的な学習の時間」等の体験型環境教育の開始(2002年)
- ・「地方分権推進法」により法定外公共物(水路、里道)が市町村へ無償譲渡(2002年)

「法定外公共物の管理に関する条例」制定(2001年)

▽職員による市長答申「親水路整備計画の提言」(2002年)

▽水路の利活用問題に全市的に取り組む「市民参画協議会」設立が課題

- ・府中市は「水と緑のネットワーク」を行政施策の柱にしている

▽地域特性(自然・歴史・伝統文化)を活かした“田園都市構想”を提唱

▽市制50周年キャッチコピー“未来へつなぐ水と緑のふるさと府中”

▽南武線新駅周辺と市民健康センター周辺の拠点整備に着手

▽市全域を対象とした総合的視点に立った整備計画・取り組みが必要

- ・府中市景観条例(1999年)や景観法(2004年)等、施策推進の環境が整う
- ・計画段階から市民参画型によるまちづくり推進の仕組み、ソフトの創出が不可欠

■「ふるさと景観の保全と創出」の提案に至る経緯

- ・市民の会と東京農工大学が4年前から協働で地域の調査や研究会を実施

▽四谷・日新町地域の豊かな価値とその危機的現状、保全の必要性を認識

▽「農のあるまちづくりを語る会」を開催し、農家・市民行政の協働によるまちづくりの場を設定

▽地域の小学校と連携し、総合学習の一環として「田んぼの生き物調査」を実施

2.市民提案

人も自然もいきいきするまちづくりー水と緑のネットワークを実現しようー

①「水と緑のまちづくり協議会(仮称)」を創設する

- ・市の諸計画を集約し、市全域を網羅した「水と緑のネットワーク」の将来構想・全体計画を立案し、その上で実施計画を推進する

②四谷・日新町地域を「ふるさと景観保全地域」として保全する

■行政への提案

- ・四谷・日新町地域を市民の「ふるさと景観保全地域」とする

- ・四谷・日新町地域を「水と緑のネットワーク事業」の対象として位置づける

- ・景観法、市景観条例の施策を推進する

- ・景観法に基づいて四谷・日新町地域の景観を保全するため、「景観計画区域」に指定し、市が市民と協働して「景観計画」を策定する

- ・用水路網、あぜ道、畦畔・屋敷・寺社林の保全と国有地(樹林地)の市有地化を目指す

- ・年間通水の実現のため、下水道の再生水(多摩川排水)の活用を検討する

■市民による実践・雰囲気づくり

- ・「農のあるまちづくりを語る会」を継続する

- ・田んぼ・用水路の生き物調査・自然観察会を継続して実施する

- ・米づくり等の農業体験や自然観察区域として活用する

- ・イラストマップを活用する

- ・農のある四季を記録・公表し、市民に理解を深めてもらう

③都市農地を守る仕組みをつくる

■行政への提案

- ・相続税等を見直し、農地の持続的保全と都市農業の活性化を実現する

▽行政、環境団体・市民が連携し、国や議会への陳情、要望やPR活動を行う

▽全国の関係団体との連携を深める

- ・日本の農的自然(水田、畑、水路、湿地、里山等)の生物多様性の保全・回復のため都市農地も対象にした“環境支払い制度”の確立を推進する

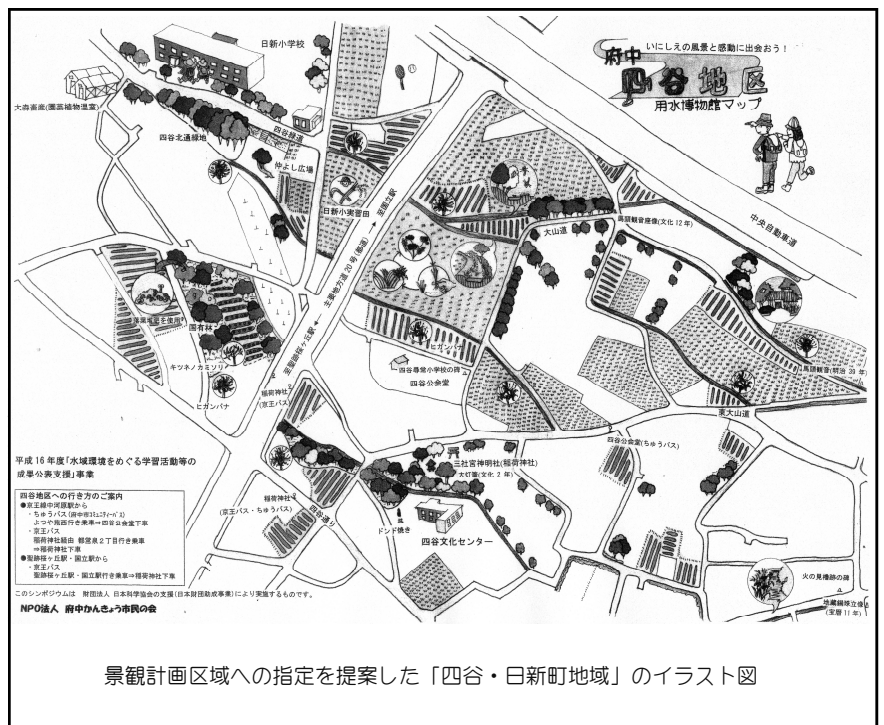
■都市農地保全の基盤づくり

- ・都市農地を保全し、地域での多面的活用を図るための実行プログラムを作成

- ・「府中田んぼの学校」事業の実現

▽市民団体、東京農工大学、用水組合、行政等が連携

- ・援農ボランティア活動の促進



景観計画区域への指定を提案した「四谷・日新町地域」のイラスト図



ヨーロッパ 視察報告

市民参画や景観 保全対策に学ぶ

鈴木 昭

府中市緑のまちづくり推進課々長

私は、昨年11月4日から2週間にわたり海外研修として、イギリス、ドイツ、イタリア、フランスの4カ国を訪問しました。以下、視察内容や感想などを記してみます。

イギリスでは、ロンドン郊外マートンにある市民団体(グランドワークマートン)を訪問しました。この団体は地元の環境整備や青少年の健全育成まで幅広く活動しており、行政からの補助金と民間の寄付金をプラスすることで、行政にはできないきめ細かな活動ができるとともに、行政と市民との調整役となり、双方の良好な関係の維持に努めているとのこと。日本における市民団体の方向性を見た思いがしました。

ロンドンのコペントガーデン地区にあった古い青果市場跡の建物は、当初、取り壊しの予定でしたが、地元の反対にあい、予定を変更し、大改装の後、しゃれたブティックや宝飾店街に生まれ変わり、半ば観光地のようになっていました。ロンドンっ子の街並みに対する思い入れの強さを感じました。



徹底した観光客対策で成功しているバーデンバーデン(ドイツ)

ドイツでは、途中ハイデルブルグ城などを見学し、フランクフルトの南約160kmにあるバーデンバーデン市を訪問しました。この町は温泉地としてローマ時代に発展し世界的に有名ですが、市当局による徹底した観光客に関する調査分析と充実した会議場施設や公営カジノ場の運営、

市立オーケストラや劇団による様々な催し物の開催などにより、長期滞在する観光客が多いとのことでした。これら、市を中心とした観光振興により市民数は増え続け、市民の平均年齢も大幅に若返っているとのこと。

ミュンヘンでは、交通問題への対応として、40年近く前に市中心部から自動車を締め出すことになりました。当初は反対していた沿道商店主も、売上げが大幅に増えたこともあり、区間延長を要望するようになったとのこと。また、地元市民ばかりでなく観光客にも喜ばれ、歩行者専用ゾーンの設置が、商業振興、観光振興になる実例を学ぶことができました。

教会の尖塔より高い建物は見あたらない

イタリアでは、フィレンツェのアカデミア美術館や大聖堂などの歴史的文化的遺跡を見学しました。フィレンツェの市街を離れ、丘の上から見下ろしてみると、教会の塔より高い建物が全く見あたりません。また、ローマでは30年以上前から条例による歴史的景観の保護に取り組んで来たとのこと、まさに「ローマは一日にして成らず」なのだと思います。

フランスでは、パリ西方、セヌ川を渡った所にあるデファンス再開発地区を視察しました。この再開発計画はまだ事業途上とのことですが、パリ旧市街に散在していた中枢機能を集約しパリの都市機能の回復・再生に成功したといわれています。ただし、この地区にある巨大な新凱旋門はシャンゼリゼ大通りや旧凱旋門を結ぶ延長線上に建てられており、この辺にパリっ子のこだわりを感じました。



セヌサンドニ県の経済開発委員会COMEXを視察(パリ郊外)

パリ市街とシャルルドゴール空港の間にあるセヌサンドニ県では、民間組織である経済開発委員会による県内の産業振興が行われていました。事務局の説明では、委員会は県、市町村、商工会議所、経営者、労働者などで構成され、今までは、パリ周辺への企業誘致の呼びかけが中心だったが、外国への呼びかけを強化し、雇用を創出し、県内の高い失業率(14%)の改善に努めたいとのことでした。

以上、簡単ですが研修の報告とさせていただきます。